

〈追悼〉

## 領家さんの思い出

藤井 和夫

領家さんが亡くなったと聞いて、ちょっとびっくりしました（…領家さんでも亡くなるんだ）。

まさに、不死身の巨人でした。いきなりお酒の話で恐縮ですが、その伝説的な飲みっぷりは、「お酒」などと丁寧に表現すると「何か違うな」と言われそうぐらい度外れにすさまじいものだったらしいです。「らしい」というのは、私が領家さんと接するようになった頃は大学を退職されただいぶ後でもう無茶をしなくなっていたからです。古くから領家さんと付き合いしてきた人たちは（いや、領家さんのことを直接はよく知らない人まで）、「それはものすごかった」と口々にその桁外れの酒豪ぶりを語ります。曰く、いつもの店で夕刻から日本酒を飲み始め、何軒かハシゴして帰る電車がなくなると領家さんの自宅に招かれさらに飲んで、さすがに明け方ダウンして寝込んで昼過ぎに目を覚ましてみたら、傍らで領家さんはまだ飲んでいた…。

後年、毎月定例の人権研究会の後、領家さんや安保さん、小島さん、紺田さんたちと私も飲むようになりましたが、領家さんの妻さを実感したのは、みんなが語るその酒量と飲む時間の長さではなく、飲みながら話す言葉の鋭さでした。飲むほどに頭が冴えるという感じで、あらゆるものが領家さんの言葉を通して関係性をもたされ、あの事件とこの思想、この概念とあの発言が、タレン

トのスキャンダルだろうが政府の施策だろうが、何もかもつながりを持ち本質を同じくしてゆくのです。その組み合わせが一見突飛もないので聞き手は一瞬うろたえますが、よく考えてみるとそれはすばらしく説得力を持っていました。

領家さんの語り口はざっくりばらんなのですが、その言葉に、最底辺におかれた弱者への強い思いとともに事象を総体で見る天才的なスケールの大きさが感じられ、さらに発言の根底には厳しい批判精神、つまり何かの権威に頼る判断や建前の話や自明とされていることへの深い疑問があって、先入観のないものの見方や現実を見る眼へのひたすらな思いが感じられました。背伸びして人権を論じる私には、「藤井さん、無理せんでもええよ」という言葉で、身につまされた当事者としての自覚をいつも問われていたような気がします。

おそらく領家さんの頭の中はきまじめな思索が充満していて、それがきらめく警句の切片として、とくにお酒を飲んだときに豪放磊落な外見を打ち破って外に出て来るのではないのでしょうか。「未定の未来を確定した過去へと造り出してゆくことが、生きることである」と言っていた領家さんは、やはり今もどこかの居酒屋の隅の席で鋭い警句をはきつつ過去を創りながら生きているに違いありません。